「DOPER」

吉田　文栄

人物表

二条　美亜（22）……本作の主人公・若手女優
黒川　藍（21）……劇中劇の主人公
西野　由利（24）……美亜の役者友達
和　也（26）……美亜の彼氏
小川　志織（40）……美亜のマネージャー
監　督（47）……美亜が主演する映画の監督
矢　野（22）……美亜の高校時代の演劇部の友人。
藍の父（52）
藍の母（47）

①黒味

T　「そう遠くない未来。ナノロボット型のインプラントを脳内に注入することによって記憶や感情、人格までをもコントロールできるようになっていた。その技術は医療、娯楽、知識やスキルのアップデートなど様々な用途として用いられ、人々の生活に浸透していた……」

②スタジオ内

立ち稽古をする二条美亜（22）、周囲を見回しながら、

美　亜「助けて、ねぇ、お願い、助けて……」

監　督「はい、カット」

と、監督（47）の掛け声。

監　督「うーん、なんか嘘っぽいんだよな。このシーンだけじゃなく全体的にさ。今のところあんま役つかめてないよね？」

美　亜「すみません」

監　督「もっと染まりきんないと」

美　亜「次までに仕上げてきます……」

③同・廊下

美亜と立ち話をする女性マネージャーの小川志織（40）。

小　川「なかなかうまくいかないね。家でもちゃんと練習してるの？」

と、美亜が持つ付箋なども付いていない綺麗な台本を見て眉をひそめる。

美　亜「隙間時間ではやってるんですけど」

小　川「念願の映画初主演でしょ？　またとないチャンスなんだから」

美　亜「はい、分かってます……」

小　川「うーん……ねぇ、一つい案あるんだけど」

美亜、顔を上げる。

小　川「マインド・ローディング使ってみない？」

美　亜「え？」

小　川「アクター仕様の脳内インプラント。知ってるでしょ？」

美　亜「去年でたばかりのやつですよね？」

小　川「うん。いま美亜が演じてる『黒川藍』の人生をAIでシミュレーションして、模擬人格を生成するの。それを元に設計されたナノマシン型のインプラントを脳内に撃ち込むと、AIでシミュレーションされたものと同じ記憶を共有したり人格を再現できるの」

美　亜「わたし、あまりそういうのは……」

小　川「安心して。うちの事務所でも利用してる人何人かいるけど、今のところ心身への危害は報告されてないから。美亜が演じる役は精神病の持ち主だけど、もちろん、そこらへんは危険がないようにちゃんと調整もするよ」

美　亜「そういうことじゃなくて、この役、自分の力で演じてみたいなって……」

小　川「ああ、そういうこと？」

美　亜「すみません……」

④マンション・美亜の部屋・居間（夕）

AI掃除機が床を掃除している。

ベットの上に横になってる美亜。

美亜、脇に置いてある小さめの藍色のケースを開けると、黒光りする拳銃型のインプラント注入装置が入っている。

AI「このマインド・ローディングですが、撮影後は、特定の酵素を脳内に撃ち込むことでインプラントを分解させ、脳を元の状態に戻すことができるそうです」

注入装置のグリップを握り、眺める美亜。

AI「万が一身の危険を感じたらその時点で脳を元の状態に戻すこともできます。ただし、一度やめるとしばらく期間を空けないといけない制約があるので、チャンスは一度きりになります」

美亜、注入装置をケースに戻す。

美　亜「冷房もっと強めにして」

AI　「かしこまりました……まだ踏ん切りがつきませんか？」

美　亜「うーん……」

AI　「AIに頼るということに抵抗感を感じているようですね。でも、日常生活でだって使ってますよね？　こうやって私に相談したり」

AI掃除機がベッドを横切る。

美　亜「そこらへんは、臨機応変というか……」

⑤道

走る美亜、どこかに電話している。

美　亜「すみません、配信の撮影が押しちゃって、10分くらい遅れます。はい、すみません……」

⑥スタジオ内

監　督「カット！」

と、立ち稽古をする美亜に歩み寄る。

監　督「うーん、これじゃあ前回と変わってないよ。足りない。もっとこう鬼気迫る感じでいってくれないと」

美　亜「はい……」

⑦同・廊下

小　川「もう、遅刻とか勘弁してよ。やっと来た大役任されてるんだからさ」

美　亜「すみません」

小　川「このままだったら、役降ろされちゃう可能性だってあるんだよ？」

美　亜「え？」

小　川「それに、これ美亜だけの問題じゃないんだから。事務所としても、信頼損なわれたら困るでしょ？　あと十日でクランクインなんだよ？　いい加減覚悟決めてくれないと……」

美　亜「はい……」

⑧カフェ・ボックス席

美亜が、役者仲間である金髪の西野由梨（24）と話

している。

美亜「ねぇ、由梨は脳内インプラントって使ったことあるんだっけ？」

由梨「あるよ。ほら、一昨年出た映画でフランス語どうしても習得しないといけなくなって、その時に一度だけね」

美亜「ああ、アリス役の時？」

由梨「そうそ。やっぱ海外との合作とかだと、語学は必要になってくるからね。で、なに、気になってるの？」

美亜「というか、うちのマネージャーからマインド・ローディング勧められちゃって」

由梨「あー、役者仕様のやつ」

美亜「うん」

由梨「周りでも使ってる人チラホラいるよ」

美亜「それでさ、いますごい迷ってて……」

由梨「そかそか」

美亜「もう本番も近くなってきたしさ、これ以上迷惑かけられないってのは分かってはいるんだけど……やっぱりああいうのに頼るのはなって……」

由梨「なるほどね……てか、美亜さ、インフルエンサーもやってるじゃん？」

美亜「分かってるよ、もちろん。その時間削れば、こっちに専念できるっていうのは……でも、やっぱり、ちょっと怖くてさ……」

由梨「怖いって何が？」

美亜「今回オファー来たのだってさ、あのバズった動画が監督の目にとまって、主役のイメージにピッタリだったからって理由じゃん？　別に演技評価されてってわけじゃないし……」

由利「卑屈になりすぎだよ」

美亜「自信ないんだよね……役者だけでやっていけるようになる未来が見えないっていうか……実はあの動画のおかげでさ、有名な配信者から声かけてもらったり、いろんなとこからオファー来てるんだ……いまそれ断るのは、、せっかく積み上げたものがなくなっちゃうんじゃないかって思うし……」

由梨「そう言うけどさ、美亜はもともと役者になりたくてこの世

界に入ったんでしょ？」

美　亜「うん」

由　梨「……だったら、映画のほうを優先すべきなんじゃない？　それじゃあ本末転倒でしょ？」

美　亜「だけど……」

由　梨「……美亜は覚悟が足りないんだよ」

美　亜「……早くからこの仕事で上手くいってる由梨には、私の気持ちなんて分からないよ……」

由　梨「……」

美　亜「……私トイレ」

と、立ち上がる。

⑨同・トイレ前

通りがかった席に2人の女子が座っていて、そのうちの1人である矢野（22）が美亜に手を振る。

矢　野「二条さん」

美　亜「……あ、矢野さん、久しぶり」

矢　野「久々だね。高校卒業して以来？」

美　亜「そうかも」

矢　野「動画観たよ。あと、ちょいちょい映画にも出てるよね？」

美　亜「まあ、少しね……」

矢　野「すごいじゃん、さすがだよ」

美　亜「いや、そんなことないって……」

矢　野「応援してるから頑張ってね」

美　亜「ありがとう……じゃあ、行くね」

と、手を振り、トイレの方へ向かう美亜。

矢　野「またね」

矢野の友人「役者さんなんだ」

角を曲がって、矢野の死角に入ったところで立ち止まる美亜。

矢野の声「同じ演劇部だった子」

矢野の友人の声「へー、すごいじゃん。当時から上手かったの？」

矢野の声「ぶっちゃけ下手だったかな」

矢野の友人の声「そうなの？」

矢野の声「まあ、努力家ではあったけどね。一回まぐれで地区大会の個人賞獲っちゃってさ、ちょっと勘違いしちゃったんじゃない？」

矢野の友人の声「えー、でも映画とか出てるんでしょ？」

矢野の声「出てるって言ってもちょい役とかだよ？　それに、ほら、今はインプラントとかあるし」

矢野の友人の声「あー、確かに。才能なくても今それあるもんね」

美　亜「……」

⑩美亜の部屋・居間（夕）

ベッドに座る美亜、こめかみにインプラントの銃口を向ける。

決心がつかず、腕を下ろして枕に突っ伏す美亜、メソメソと泣く。

顔を上げ、決意した表情でゆっくり銃口をこめかみにあてる。震える腕。

美　亜「（閉じた目元のアップ）……」

■メインタイトル画面『DOPER』

タイトルが出るタイミングに合わせて重低音を重ねることで、インプラントが美亜の脳内撃ち込まれたことを示唆。

⑪独立洗面台（夜）

鏡（上手）を見る美亜。

×　×　×

劇中劇の主人公の模擬人格である黒川藍（21）の正面の姿が美亜の脳裏をよぎるように一瞬だけインサート。ボブカットの美亜と違い長髪で神経質そう。

×　×　×

美　亜「……」

×　×　×

さらに、藍の幼い頃のトラウマが蘇る。

藍の母（47）を殴る藍の父（52）。藍の一人称視点

で再現される。

藍の父「何度も同じこと言わすんじゃねえ」

藍　「パパもうやめてよ」

と、泣き叫んでいる。

×　×　×

美　亜「……」

鏡を見据える美亜の横顔から鏡の方（上手）へ向かって素早くパン。

⑫藍の実家・独立洗面台（夜）

前のカットから続けて上手に素早くパンすると、対をなすように同じく洗面台の鏡（下手）を見つめている学生服の藍（18）。

（前後のカットを繋ぐことでワンカット風にする）

藍の父親が突然入ってきて、藍に暴力を振るう。

藍の父「おせえよ、帰ってくんの。バイト代は入ったのか？」

頷く藍、カバンの中の財布から数枚の紙幣を取り出し、無言で手渡す。

父親が紙幣をぶん取って数える。

藍の父「なんだ、これしかねえのか」

と言い捨てて居間のほうへと立ち去ろうとする。

藍　「……」

と、父親を睨む。

父親、視線に気づいて、

藍の父「あ？　なんだよ、その目は」

と、藍の方へ歩み寄って、暴行を加える。

藍の父「誰のおかげで暮らしてけると思ってんだ」

怯える藍の目線の先には包丁スタンドに収められた包丁。

気が済んだのか父親が立ち去る。

立ち上がり、ふたたび鏡を見る藍。

下手に素早くパン。

⑬独立洗面台（夜）

鏡から素早く下手へパン。

美　亜「……」

ハッとする美亜の横顔。

鏡に再びパン。血みどろの刃物を持った藍。

美亜の肩越しカットに切り替わると、すでに鏡には藍の姿はない。

玄関のドアが開く音。

ハッとする美亜、玄関のドアを見つめる。

ドアが開き、美亜の彼氏・和也（26）が姿を現す。

（ジャンプカット）

カメラ煽り気味で美亜を映す。美亜が手に持つ包丁に気づきハッと床に落とす。

和　也「大丈夫か？」

ひきの絵。自分が料理をしていたことに気づく美亜。

（キッチンは独立洗面台の隣に併設）

和也、靴を脱ぎ包丁を拾う。

和　也「あぁ、もう、焦げちゃってるよ……」

と火を止める。

和　也「あのさ、料理すらまともにできないの、お前は？」

と、腹立たしげに声を荒げている。

和　也「今日は仕事終わりに寄るから、俺が来るまでにメシ作っといてって言ったよね？」

美　亜「ごめん……」

⑭美亜のマンションの外観（夜）

深夜。美亜の部屋のみ灯りが灯っている。

⑮美亜の部屋・居間（夜）

寝巻き姿の美亜、ベッドの上でスマホの画面を眺めている。

画面には小川からのメッセージ。

T　「再確認だけど、明日は7時集合に変更だから遅れないようにお願いね！」

美亜、スマホを置いて間接照明を消す。

少しの間。

藍の声「私のシーツどこ？」

と、耳元で囁く声がする。

美　亜「え？」

藍の声「人の部屋のモノ勝手に取り替えたのあんたでしょ？　私の黒いシーツどこにやったの？」

美　亜「誰？」

と、間接照明をつけてあたりを見回すも誰もいない。

美　亜「……」

美亜、ふたたびベットに横たわる。

×　　×　　×

翌朝

カメラ、同じポジションでジャンプカット。

カーテンの隙間から朝日が漏れる。

美亜の寝巻きとシーツが黒くなっている。同時に不穏なSE。

目覚める美亜、そのことに気づき動揺する。

周囲を見渡すと、カーテンやソファーカバーなどいくつかのものが黒い家具に置き換えられている。

美　亜「なんで……」

美亜、スマホで時間を確認しハッとする。

美　亜「うそ、アラームかけたはずなのに……」

と、急いで支度を始める。

⑯同・独立洗面台～玄関（朝）

着替え終わった美亜、居間から走ってきて鏡を見ながら髪形をチェックし、すぐに靴を履く。

ドアを開けると朝日が差し込む。外に一歩踏み出す。

×　　×　　×

（ジャンプカット）

次の瞬間、暗い玄関に戻ってくる美亜。

ドアが閉まる。

美　亜「あれ……？」

動揺した美亜、ふたたびドアを開けて外を確認する

と夜になってる。

美　亜「……どうなってんの？」

藍の声「心配しないで」

美　亜「!?」

藍の声「これからは外では私があなたの代わりやってあげるから」

美　亜「誰なの、あんた？　……勝手なことしないでよ!!」

と、その場に崩れ落ちる。

⑰美亜の部屋・居間（夜）

壁を背に、床に座りながら電話する美亜。

小川の声「美亜の演技、プロデューサーも褒めてたよ。ほんと、本番までに仕上げてくれて安心した」

美　亜「それなら良かったです……」

小川の声「明日もこの調子で頑張ってね」

美　亜「はい……」

×　×　×

部屋は暗く間接照明だけがついている。

何かを手に持ち戻ってくる美亜、ベッドに座る。

美亜、持ってきた包丁の刃を左腕に当てて自傷行為をしようとするも、それをやめてゆっくりと刃物を持つ手を振り上げる。

次の瞬間、自分の左腕めがけて振り下ろす。

×　×　×

ベッドの上の美亜、ビクッとなり目を覚ます。

間接照明だけがついていて室内は暗め。

慌てて布団から左腕を出して確認する美亜。

腕は無傷。

美　亜「……」

次の瞬間、右袖を布団から出すと、血の滲んだ包帯が巻かれている。

美　亜「!?」

包帯を慌てて外すと、腕には傷ひとつない。

藍の声「よく眠れた？」

美　亜「（ハッとして）……これ、あんたがやったの？」

藍の声「あのね、言いにくいんだけど、昨日、見ちゃった。あんたの彼氏が浮気してるとこ」

美　亜「……」

藍の声「あんたの友達の金髪の子。あの子と歩いてるとこ見ちゃった」

美　亜「そんなわけないでしょ……」

藍の声「仕事できないうえに浮気までされちゃうって、もう誰にも必要とされてないよね、あんた」

美　亜「やめて、勝手なこと言わないで！　消えてよ、もう！」

と、頭を抱える。

×　　×　　×

（ここから、美亜の精神がおかしくなっていく過程を、短いカットの断片をいくつも重ねて表現する。徐々に各々のカットの断片が短くなっていき、混沌とした状態になる。時間経過の描写がある場合、毎回服が変わっている）

独立洗面台の前。美亜が薬の瓶の蓋を開け、カプセルを取り出して飲み込む。

×　　×　　×

美亜、ベッドに突っ伏して泣いている。

×　　×　　×

朝、ドアを開け玄関の外に踏み出す美亜。

×　　×　　×

夜、ドアを開け玄関の室内に帰宅する美亜。

×　　×　　×

美　亜「（頭を抱えながら）消えろ、消えろ、お願いだから消えて！」

×　　×　　×

薬を口に入れる美亜。

×　　×　　×

高速度撮影された雲の動きによって時間の経過を現す。

×　　×　　×

美　亜「あいつ絶対浮気してる、許さない……」

と、何かに憑依されたかのようにぶつぶつ言ってる。

×　　×

美亜、何かに取り憑かれたかのように白紙にペンで何かを書き殴っている。

×　　×

朝、ドアを開け玄関の外に踏み出す美亜。

×　　×

夜、ドアを開け玄関の室内に帰宅する美亜。

×　　×

薬を口に入れる美亜。

×　　×

美　亜「許さない、許さない、あいつ絶対許さない……」

と、取り憑かれたようにぶつぶつ言ってる。

×　　×

高速度撮影された雲。

×　　×

白紙に何かを書き殴る美亜。

×　　×

薬を口に入れる美亜。

×　　×

美　亜「許さない、許さない……」

と、取り憑かれたようにぶつぶつ言ってる。

×　　×　　×　　(C.O.)

（黒味）

×　　×　　×　　(C.I.)

美亜が床に倒れている。

床には雑多なものが散乱している。

壁一面には「バカ」「死ね」「消えろ」などと書かれた紙が貼られていて殺伐としている。

美亜の手元付近にあるスマホの着信音が響く。

救急車のサイレンの音。

⑱病院・病室

病室のベッドで点滴を打っている美亜と脇にたたず

む小川。

小　川「こうなったら撮影続けるのも難しいかもね」

美　亜「大丈夫、ちょっと睡眠薬飲みすぎちゃっただけだし、わたし全然平気です」

小　川「そうもいかないでしょ。それにしても、全く。自己管理くらいちゃんとしてくれないと。前も言ったけど、あなただけの問題じゃないの。これ以上事務所に迷惑かけられると困るんだから」

美　亜「……」

小　川「今後の撮影の方針に関しては、また報告がありしだい伝えるから。じゃあ、わたし、そろそろ行くから」

と、にべもなくその場を立ち去る小川。

美　亜「……」

美亜、誰もいなくなった病室で深呼吸して目を閉じる。

⑲黒味　(C.O.)

藍の父の声「何度も言わせるなよ！　おい、分かってんのか？」

⑳藍の実家　(C.I.)

目を開けると、父親が藍の母親を殴っている光景が飛び込んでくる（一人称視点）。

カメラが一人称視点から三人称視点に切り替わると、美亜の姿が藍になっている。

藍の母親を殴っている父親。

藍の父「なんか言ったらどうなんだ！」

と、殴り続ける。

藍　「ねぇ、もうやめなよ」

父親が形相を変えてこちらに向かってくる。

藍の父「お前が口だしてんじゃねぇよ」

と、藍に向かってきて殴ろうとする。

腕で顔を覆い、身構える藍。

この時、ふたたび藍の一人称視点に切り替わり、画面が藍の腕で覆われて真っ暗になる。

少しの間を置き、２人の女子の笑い声が微かに聞こえてくる。

㉑飲食店

画面から腕が離れて明るくなる。

友人Ａの声「ねぇ、あいつのことどう思う？」

藍の姿は美亜に変わっている。

少し顔を上げると、間仕切りの向こう側に由梨と友人Ａが談笑する姿が見える。

由　梨「あぁ、うん、まあセンスないよね」

友人Ａ「だよね？」

由　梨「はっきり言って、これ以上続けたところでって感じ」

友人Ａ「分かる！」

由　梨「てか、この前あいつにそのまま言ってやったんだよね」

友人Ａ「マジで？　ヤバ！」

と、笑い声をあげる。

友人Ａ「てか、あいつの彼氏とったってマジ？」

由　梨「え、ちょっと待って、誰に聞いた？」

友人Ａ「結構みんな知ってるって」

由　梨「マジかー」

嘲笑う２人を横目にいたたまれなくなりその場を去ろうと立ち上がる美亜、振り向きざまに誰かとぶつかる。

㉒和也の部屋・居間～玄関

振り向きざまの美亜と衝突した和也、持っていたコップを落としてしまい割る。

和　也「あぁ、もう！」

いつの間にか目の前は和也の部屋になっている。

和　也「ったく、気をつけろよな」

と、雑巾を持ってくる。

和　也「鈍臭すぎんだよ、お前」

と、破片を拾い集め、雑巾で床を拭く。

和　也「言われたことも何一つできないしさ、ほんとポンコツだよ

ね。小学生かっつの。大体いつもさあ……」

美　亜「……」

振り返り、玄関の方へと走り出す美亜。

和　也「おい！」

玄関のドアを開ける美亜。

㉓藍の通っていた高校・屋上～階段

ドアを開けた先は学校の屋上で、唐突にバケツ一杯の水が体にかかる。

３人の女子生徒の仕業だ。

美亜の姿は制服を着た藍に変わっている。

ずぶ濡れになった藍の姿を見て笑う３人。

女子生徒Ａ「お前キモいんだよ」

女子生徒Ｂ「さっさと死ねよブス」

藍　「……」

藍、背中に何枚かの紙が貼られていることに気づき、剥がす。「バカ」「死ね」「消えろ」などと書かれている。

女子生徒Ｃ「バカじゃないの？」

藍、ふたたび室内に戻り、屋上の階段を駆け降りる。

㉔藍の実家・廊下～居間

階段を降りきると、そこは藍の実家の階段前になっている。

勢いあまって壁にぶつかる藍の姿は、いつの間にか美亜に変わっている。

美　亜「……」

美亜、異変に気づき居間のほうを凝視する。

赤い血のようなものが床に広がっている。

美亜、ゆっくりと居間のほうへ近づいていくと、包丁を持った藍が佇んでいる。

そばには、今しがた刺されたであろう藍の父親が倒れている。

美　亜「……」

由梨の声「ねぇ、大丈夫？」

㉕和也の部屋・居間（夜）

美亜、ハッと気づくと、和也の部屋にいる。
目の前には由梨と和也。

由　梨「どうかした？」
美　亜「あ、いや……ごめん」
和　也「なんか今日ずっとぼーっとしてるよな、お前」
美　亜「ちょっと、顔洗ってくる……」
と、立ち上がる。

㉖同・独立洗面台（夜）

水を止めてタオルで顔を拭く美亜、ふと鏡に目をやると藍の姿。
居間のほうから、談笑する由梨たちの笑い声が聞こえてきて、藍がそちらに興味を示す。
居間へと向かう藍、鏡から消える。

㉗同・居間（夜）

由梨と談笑する和也。

和　也「でさ、あいつこの前のデートでね……ん、どうした？」
と、戻ってきたばかりの美亜の視線に気づく和也。
美　亜「……やっぱり、そうだったんだ？」
と、美亜の声の雰囲気がいつもと違う。
和　也「はい？　なに、どうしたの？」
美　亜「……誤魔化しても無駄、知ってるんだから」
由　梨「なに言ってんの？」
藍　「あんたらが浮気してるってこと」
（これ以降は、カットが変わるごとに、美亜と藍の姿が切り替わる）
和　也「いやいや、なんでそうなるの？　それ何かの冗談？」
と、笑いだす。
美　亜「黙れ！」
和　也「いや、落ち着けって。どうした急に？」

と、立ち上がり、急変した美亜を落ち着かせようと近づいていく。
藍、背後に隠し持っていた包丁を振り上げ和也の首を切りつける。
和也「!?」
血がドバッとでて、その場に倒れ込む和也。
由梨の悲鳴が響く。
狼狽えて立ち上がることのできない由梨にゆっくり近づく美亜。
後退りする由梨。
由利「いや……いや……」
ついに由梨を四隅に追い込んだ藍、包丁を大きく振り上げて、由梨の腹部へと突き刺す。
藍「ずっと陰で嘲笑ってたんでしょ？」
美亜が大きく腕を振り上げ由梨の腹部を刺す。
美亜「人の男奪ってさ」
（由梨の腹部を包丁で突く美亜と由梨の動作をカットバック風に交互に見せる）
藍「なんで、わたしばかりこんな目に遭うの？」
何度か突き刺した後、ついに息絶える由梨。
息切れしている美亜、ハッと気づき包丁を手放す。
絶句する美亜。
美亜「なんで、なんで……」
と、狼狽える。
美亜「助けて……助けて……ねぇ、お願い、誰か助けて……」
少しの間をおき……
監督の声「はい、カット！　オッケー!!」
と、劇中劇だったことが明かされる。
助監督「これにて、映画『DOPER』クランクアップになります！」
関係者の拍車と歓声。
由梨が起き上がり、美亜と抱き合う。

㉘スタジオ・廊下

美亜と小川が立ち話している。

小　川「それにしても、病院に運ばれた時はどうしようかと思ったけど、無事終えられてよかった」
美　亜「ご迷惑おかけしました。今日は帰ってゆっくり休もうと思います」
小　川「うん」
廊下を曲がってきた由梨が足を止め、少し離れたところから2人の様子を伺う。
美　亜「あ、そういえばこれ」
と、マインド・ローディングのケースを鞄から取り出し、手渡す美亜。
小　川「ああ、これ。すごかったでしょ？」
美　亜「うーん……わたしは、必要ないかな」
小　川「え……ああ、そう？」
美　亜「それじゃあ、お疲れ様でした！」
と、その場を立ち去る美亜。
小　川「（釈然としない感じで）お疲れ様……」
と、ボソッと呟き、何気なくケースを開ける。
小　川「あれ……使わなかったの!?」
と、美亜に呼びかけるも、美亜はもうその場にはいない。
遠くから微笑ましく眺める由梨。

㉙美亜の部屋・居間
美亜、壁に張ってある何枚もの紙をくしゃくしゃにしてゴミ袋に捨てている。
×　×　×
美亜、黒いカーテンを外して元のカーテンに戻す。
他の家具も黒いものからもともとあった家具に置き換えられている。
藍の声「わたしの部屋のもの勝手にいじらないでって言ったよね」
と、一瞬不穏な雰囲気になるも、
美　亜「もうクランクアップしたから稽古はしなくていいの。声も戻していいよ」
と、部屋の隅にあるAIのスピーカーを見る。

AI　「クランクアップおめでとうございます。うまくいきましたか？」

と、藍の声の正体はAIだったことが明かされる。

美　亜「まあね。インフルエンサーの仕事、全部断ってまでやったかいがあったかな」

AI　「毎日役作りやら稽古づくめでしたもんね」

と、ディスプレイに今まで撮りためた美亜の演技が流れる。

これにより、家の中で起きていた怪異現象はすべて美亜の役作りや稽古だったことが判明する。

ディスプレイの映像：S16〃の玄関。藍の声「心配しないで。私が代わりに仕事やってきてあげたから」

美亜「誰なの、あんた？……勝手なことしないでよ」と、少しの間を置き、美亜がカメラを止めに来る。続いて、S17〃のベッドの上の美亜。血の滲んだ包帯を慌てて外す様子。

美　亜「もう演技の確認もしないからいいよ。二重人格の役は、もうおしまい」

ディスプレイの前には、付箋だらけでボロボロになった台本や、演技のために参考にした精神疾患関連の本が雑然と散らばっている。

カーテンを付け替え終わった美亜、ふと棚の上に載った何かを見つめる。

カット切り替わると、フレームの手前端にその〝何か〟が映ってるが、ピンボケしていて何かは判明しない。同じフレーム内の奥にたたずむ美亜にピントが合った状態。

㉚同・居間（S10〃の回想）

インプラント注入装置の銃口をこめかみに押し当て、引き金を引こうとしている美亜。

美　亜「（閉じた目元のアップ）……」

刹那、重低音のようなものが鳴り響く。

目を開ける美亜、音がしたほうに視線を送る。

今しがた棚の上から落下したものが床に転がっている。

美亜、注入装置をベッドの上に置き、立ち上がる。

棚のほうへと歩みより、落下したものをおもむろに拾い上げる。

それは、美亜が高校時代に受賞した演技賞のトロフィーであった。

美　亜「……」

（了）